

東京研修

今まで私が見てきた世界は何だったのだろう、と思わせられた。16年間宮城県仙台市という地域に住んできて、自分の知らない世界がまだまだたくさん広がっていることを、改めて自覚した。

東京研修一日目、まず最初に私が驚いたのは、所狭しと並んでいる背高のビル、そして道路を流れる車の多さだった。何回か東京には訪れているのだが、高校生になって始めてきた東京は、面積としては小さいはずなのに、とても広く感じた。その後、霞が関に移動して、有名企業の元偉い人たちに話を聞いた。

まず初めにお話を伺ったのは、青木さんという方だった。彼は、ICT関連の事業に携わっていた。彼の話はICTだけのことではなく、世界全体を見ていた。「これからの世界は、ICTだけの話にとどまらず、世界が一つの集合体になる、グローバル化が進められるだろう。そして、きみたちは自分の住んでいる地域内のコミュニティーを飛び越えてもっと果てしない大海原に放り込まれる羽目になる。その時、大海原で何が起きているかを把握する創造力、それに対応する柔軟性、そのなかで人の考えを尊重する共和制が重要だ。」

単純に、すごいと思った。自分とは違い、この人は多くの経験と知識、幅広い視野を持っていると思った。そして、そのすごい人の話を聞いて、今の高校という名のモラトリアムを一日一日考えながら生活しようと決心した。

次に話を伺ったのは、樋口さん、海洋の自然環境の観点から国際法を考えるという斬新な発想で研究をしている。国際法とは、国と国同士のあいだで定められるルールのことだ。彼女は国際法に関して様々な研究をしているが、人間関係においていろいろ問題も発生するらしい。「国際法って、あらゆる方向から考えないといけないから、各方面の専門家、エキスパートが集められるわけです。当然、自分たちの考えには絶対的な自信と誇りを持っているんです。だから、意見の衝突もしょっちゅうで。でも、そこで相手の考えを全面否定するんじゃなくて、まず受け入れ、尊重する。それが大事なんです。」

相手の意見を尊重する。一見簡単そうに見えて、実は意外と難しい。自分のプライドと折り合いを付けなければならないからだ。しかし、そこで拒絶反応を起こしていたら、いつまでたっても分かりあうことは不可能だ。今や肌の色、言語、他国関係なく生活を共にする異文化共生の世となっている。その中で、今言ったようなことは必要不可欠となっていくだろう。私はそれを実践しているが、その重要性を再確認した。

最後に話を伺ったのは、水口さんという方だ。彼は世界の飢餓問題についてWFPという機関に所属し活動している。世界には飢餓で苦しんでいる人が約一億人いるという。それに対し、日本の年間食料廃棄物量は飢餓の国に支援する年間の食料の二倍近くに当たる。

「この事態を変えるためには、そもそもの社会の仕組みを変えていかなければならない。」と水口さんは言う。ここで重要となってくるのは青木さんの話ともリンクしてくるが、身近なところから変えていくということ。まわりをよく見渡して、何かできることがないかと探す。例えば、食事を残さず食べることで廃棄量は格段に下がる。こうした小さいことの積み重ねから、努力していくことが大事なのだと私は学んだ。

その後、各自で昼食をとり、私は班のメンバーと共にコナミエンタテインメントに向かった。パワプロやウイニングイレブンなど、数多の面白いゲームを世に送り出している会社とあって、社内には試作段階のゲーム機やトロフィーがあちこちに置かれていた。対応していただいた広報部のひとは、とても気さくに私たちに話しかけてくれた。

だいぶ時間がたって、残り 30 分になったころ、社員の方から衝撃的な言葉が出てきた。「まあ、一番大事なのは休憩だよな〜」「そうですね、土日は基本家でゲームしたりなんかしてます。ほかの人たちも、定時になったら仕事スッとやめて 6 時以降はフリーですね」なんと、ゲーム作りが一番大事なのが休憩とは！プログラミングの技能やアイデアを差し置いて休憩とは！私は正直、何事も根詰めてやるタイプなのでかなり意外だった。理由を聞いてみると、「休憩中の方がスッとアイデアが出やすいんですよ。それに、自分の時間を持つことで心にも余裕ができますしね。」と答えたいいただいた。自分には全くなかった発想だったので、今度実践しようと思った。

それからホテルに戻り、元二高OB、OGと座談会をした。主に東大生の先輩方に話を伺っていたのだが、またしても、驚きの発言が飛び込んできた。

「高 1 の頃はあそんでたな〜」「ちゃんと高校生活は満喫したほうがいいよ」「東大意識し始めたの、二年の秋ぐらいだから。」

私の東大生のイメージが崩れ去った。私の東大生像は、小さなころから有名塾に通い、ズーッと勉強づくしで、そんなに高校生活を enjoy せずに過ごしてきたものの集団だと思っていた。実際、そのような人もいると思う。しかし、先輩方が口々に言うには、「何事も全力でやり切ったほうが受験のとき勉強に集中できる」というのだ。「部活を途中でやめたり、何かにおいて少しでも手を抜いた奴は、結局勉強にも身が入らなかったりして、で結局落ちる。そうなるよりは存分に高校生活を楽しんだほうがいいと思うよ。」

この話を聞いて、私は少し安心した。今、高校生活を謳歌していて受験は大丈夫なのか、という漠然とした不安があった。本当にこのままでいいのかと。でも、それはそれ、これはこれとして置いて、今を一生懸命に生きることが大切なのだと知った。

そして、いよいよ、東大研修が始まった。まず目につくのは、巨大な大聖堂のような建物だった。そこではドイツ語の授業をやっているらしい。大学になると授業の規模、受け人数が大幅にUPする。そのための処置だそうだ。大学に入ると見える景色が一変する

というけれど、まさに世界が変わった気分になった。

そのあとの座談会も、新鮮なことの連続だった。将来の道から東大を選んだというアメリカナイズな方法から、元々は別の学科に入りたかったが、1年半の授業を通して自分のやりたいことと違うと感じて、学科を変えたりと、十人十色様々な経験を聞かせてもらった。私は、将来の仕事も、そのためにはいる大学も決まっている。だからこそほかの視野も持って、未来を考えていかなければならない。そのためのいいきっかけになってよかったと思う。

その後、東大の農学部にお邪魔させてもらった。そこで見たのは、最先端の科学の結晶だった。ここでは、グルコースという素材をつかったものづくりの研究を行っていた。これで将来のエネルギー問題を解決できるのだという。世界を動かしかねない研究に、自分がまだまだちっぽけな人間だと思い知らされた。

2日間の東大研修から私が考えたのは、世界の変容だ。仕事を例にとってみるとそれが良くわかる。今の仕事は47パーセント消えるといわれていて、ほかの仕事も縮小するか、やり方が変わってくるらしい。その変化の波にのまれないようにするためには、やはり今の自分のままで止まったままではいけない、常に周りを見渡しつつ、走り続けなければならないと感じた。そのように生きていくためには、積極的に前に立ち、今のうちから様々な困難にぶち当たって、対応力を身に着けること。本を読んで教養を身に着ける。この期間にやるべきことがたくさんある。どうなるかわからない先、模索しづけて生きていきたい。